



住み慣れた地域でさいごまで生きるために

渡邊醫院 渡辺 良

横浜市西区に開業して15年がすぎました。町医者
の原点は地域に住む人びとの生・老・病・死を見守る
ということです。

いま、ある患者さんを思い出します。その方はひとり暮らしの高齢女性Kさん。65歳まで働き、退職後は水墨画、篆刻（てんこく）、お茶、書道、三味線など多くの趣味を楽しみました。2年前から何もしなくなり、物忘れが目立つため、親戚に連れられ私の外来を受診。心身の虚弱は明らかで、介護保険を申請し訪問診療することにしました。2週間後ケアプラザのスタッフと自宅に伺うと、万年床に寝たまま、殆ど食べていない、入浴もしていません。しかし、自分の家だからここから動きたくないと言います。

たくさんの人たちに見守られ

ヘルパーさんに毎日の食事の世話と身体の保清をお願いしました。遠くの親族は入院させてほしいと希望しましたが、医者としては、自分の家を離れたくないという本人の意向を尊重したいと思いました。入院すると恐らく認知症は進むでしょう。しばらく毎週往診することにしました。1ヶ月後衰弱はゆるやかに進み、やせて足にむくみが出てきました。親族は、何も食べないのを見ていてのがつらいので入院して点滴でもしてほしいと再び希望されました。本人は、「ここは私の家、どこにもいかない。私は小さいころからひとりだったから、今も全然寂しくない」と話します。

2ヶ月目、地域カンファレンスをもちました。ケアプラザ及び区役所高齢支援課スタッフ、ヘルパー、訪問看護師、ケアマネジャー、近隣の友人ふたり、親族、そして主治医として私が参加。昔からの友人は普段からゴミ出しなどを手伝っていて、今はヘルパーさんが

いないとき訪ねて声をかけてくれています。衰弱が進んでいましたが、Kさんの気持ちに添いながらさいごまで見守っていくことを皆で確認しました。

ヘルパーさんは日に3～4回訪問。褥創ができたので、看護師に毎日の処置をたのみ、介護用ベッドをいれ、訪問入浴を依頼。本人は「ありがとう。こんなしてもらったらばちがあたるよ」と言っていました。そして、訪問をはじめて5ヶ月後のある朝、永眠されました。その前夜にヘルパーさんが訪ねた時にはいつもと変わりなく、静かなさいごでした。

“死んだ”のではなく“生き終えた”

ふりかえるとKさんはとにかく自分の意志がはっきりしていました。普通家族が入院をすすめると周りへの迷惑を考えて、自分の気持ちに反して受け入れる方が多いのですが、彼女は違っていました。彼女は既に公正証書遺言書を作っていたことが後でわかりました。自分の死を見据えていたのです。近隣の方々の見守りの力も大きかったし、24時間連携の医療及び介護の力もあったでしょう。Kさんの穏やかな様子を見てはじめは不安を訴えていた親族も、途中から私たちの在宅ケアに信頼を寄せてくれました。

これら地域の力が集まって本人の希望に沿った望ましい看取りをもたらしたのだと思います。Kさんは死んだのではなく生き終えたのだといえましょう。看取りを通してその方の記憶、生きた軌跡がその地域に刻まれる。そのようにして一種の看取りの文化が育まれてゆく。ひとり暮らしで認知症となっても、癌や老衰で寝たきりになっても、近隣の方やささまざまな職種の方が連携してさいごまで見守っていくことができる、そのような地域の力を育んでいきたいものです。

(わたなべりょう)

渡辺 良氏プロフィール：1949年横浜市生まれ。横浜市立病院神経内科部長、横浜市立老人リハビリテーション友愛病院院長を経て、父の後を引継ぎ2000年渡邊醫院開院。日本神経学会専門医。日本内科学会認定内科医。横浜市西区医師会理事。認知症サポート医。横浜市西区在宅医療エリアリーダーほか。著書：「落葉の思想」（かまくら春秋社）